勇者の新たな冒険　～日本と言う世界での戦い～

大樹の心

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
勇者の新たな冒険　～日本と言う世界での戦い～

【Ｎコード】
Ｎ６６１０Ｙ

【作者名】
大樹の心

【あらすじ】
剣と魔術の世界『ドルガミン』から、現在の地球『日本』に異世界トリップをした勇者マレト。見た事もない建物や高度な乗り物などに驚き戸惑う勇者だが、オタクと言われる仲間達に巡り会い、日本での生活に少しずつ慣れながら成長をしていく。しかし、ある男と出会う事によってその事態が一変する。ゲームでしかありえない『剣術や魔術』と、現代の技術が作り上げた『高度な武器』の数々・・・・・それらがぶつかり合う激しい戦いが現在の日本を舞台に繰り広げられる――――――

魔王なき戦い

曇り空に包まれた暗がりの城中で、屈強な戦士達が武器を手に取り戦いを凌ぎあう。

剣と剣がぶつかり激しい金属音を響かせ、弓矢に射抜かれた戦士が苦悩の表情を浮かべ倒れ死に至る。

巧妙な仕掛けにより城壁から槍が突き出し、声を上げる間もなく串刺しにされる戦士達。

神秘的とも思える魔術の光を扱う魔法使いが、爆発音とともに立ちはだかる者達をなぎ倒す。

あらゆる所で血しぶきが上がり、無残な惨劇を繰り広げる。

その城では数千にも及ぶ者達が、それぞれの武器と知恵を使い生死を分けた戦いを続けていた。人として生きる為の自由を求めた戦いを・・・・

この世界の名前は『ドルガミン』。1年前までは凶悪な魔族達がその全てを支配していた世界だ。

1年前の『魔王』と『大賢者』の死闘・・・・・繰り出す魔術のぶつかり合いによる壮絶な戦いは、共倒れという結末を持って終焉を迎えた。

それから数日のち、我が物顔で世界を支配し続けていた魔族達が瞬く間に消えうせ、この世界は平和に包まれたかと思われた。

しかし、魔族がいなくなるとすぐに人間達の野心が芽生え始める。

バージャス国がその圧倒的な軍事力によりドルガミンを支配してし

まったのだ。理不尽な法律により人々を苦しめ、国に属する者以外は皆奴隷として扱われる。そんなすさんだ世界と化してしまったドルガミンを救うべく立ち上がったのが、『魔王を倒せる唯一の勇者』と言われていた若き少年だった。
勇者は、奴隷と化していた人々に戦意を取り戻すと、共に武器を手に取り、バージャス国に攻め入ったのだ。

今、まさにここで繰り広げられている死闘が、そのバージャス国と奴隷との、自由を求めた戦いであった。

その城中の奥にある王の間。そこでは、激しく活気だった戦いを続ける城内とは違い、静けさすら感じる無音の空気を作り出している。そんな王の間で、地位の違いを感じさせる金の光沢いい鎧に身を包んだ若者と、その若者より更に幼く見える１０代半ばほどの少年が剣を片手に睨み合いを続けていた。その２人が繰り広げた戦いの激しさが、崩れかけた城壁からも目に見て取れる。

重い重装備をした鎧より身軽さを優先した身なり。そんな幼き少年が軽快に跳ね上がると掛け声とともに剣を振り上げた。

キンッ！！！

戦いの中ではもう聞きなれた剣と剣が交じり合う金属音。

重なり動きを止める剣と剣の合間からじりじりと睨み合う２人の目と目。

「ふん・・・・・対した事ないな・・・・・・・」

若者が鼻につく枯れた声でそう言うと、少年の胸元にあてがうよう

に手のひらを差し出す。すると少年の胸元が一瞬にして赤く輝きだした。

『ボン！！！！』っという爆発音と共にその光が破裂をし、大きな悲鳴を上げた少年の身体が、崩れかけた城壁まで吹き飛ばされる。ぶつかり崩れる城壁に埋もれた少年が、動かぬ身体のまま若者を睨む。

「・・・・・・魔術？？・・・・・つっ・・・・強い・・・・・・」

その剣術から、数多くの猛者と言われる剣士や獰猛な魔族達を地に沈めてきた少年。その少年が驚きおののくほどのその実力。睨まれた若者は、不気味に微笑むと颯爽とした足取りで金の鎧を揺さぶりながら少年に歩み寄った。

「『ドルガミンで最強の魔剣士』と言われているこの俺だ・・・・・魔王亡き後、この私を脅かす者などどこにも存在しない。」

「くそぉぉぉぉ！！！」

その自信ある涼しげな表情に苛立った少年は、理性を失い持てる魔術を繰り出し若者に向かって連打した。

その白く光る激しい魔術を正面から受ける若者の身体が、爆発の煙の中に包まれ消えていく。

「ゴホゴホッ・・・・煙がすごいな・・・・・・こんな魔術は平気だけど、煙は少し苦手かな・・・・・・」

その魔術を馬鹿にするように、目の前の煙を手で大きく振り払いな

がら不敵な笑みを浮かべる。

ザクッ！！！

剣で何かを切り裂く鈍い音が王の間に響き渡る。すると、涼しげだった若者の顔から瞬時に血の気が引いていく。そして、目を見開き冷や汗を流すとその場に力なくうずくまった。

倒れる若者の背後には、いつの間にかその少年が息を切らせながら立っている。魔術で気を引き、その背後から若者を切り裂いたのだ。

「なるほど・・・・・やるじゃないか、勇者マレト。さすが、『魔王を倒せる唯一の勇者』と言われていただけはある・・・・・・・・・・・・」

滲むように金の鎧を赤く染めていく若者。背中の痛みをこらえながら、苦しい表情で少年、勇者マレトを睨んだ。

するとマレトが、若者に向け剣をまっすぐ突き出し答える。

「この世界を、お前の自由にはさせない・・・・・バージャス国の若き王子、バルジル！！」

そして2人がまた睨み合うと、王子バルジルがニヤッと微笑むように口先を上に上げた。

「魔王と大賢者が死闘を繰り広げ、共に死してから1年。魔族も消え王も倒れ、この世界の全てが俺の思い通りになると思っていたのに・・・・・勇者と言う邪魔者が、まだ居た事を忘れていたよ・・・・・お前も魔王や大賢者と共に、死んでしまえば良かったのにな！」

そう言うと、持つ剣でマレトの剣を払いのけ、大きく後方に飛び跳ねた。そしてまた、戦いの意志を示すように剣術の構えをしながらマレトを睨み叫ぶ。

「しかし、俺は負けない！！この世界は俺の物なのだ！！」

睨まれた目を真っ向から受けながら、勇者マレトもバルジルを鋭く睨んだ。

「そんな事はさせない！！必ず平和なドルガミンを取り戻すんだ！！」

2人がその想いを叫ぶと、また大きく剣を振り上げ跳ねるように駆け寄る。

「いやぁぁ！！！」
「てやぁぁ！！！」

そして、2人が衝突するその時！魔術に似た青い光がその付近一帯を包み込む。そして、聞いた事もない妙なワープ音が、王の間に響き渡る・・・・・・

・・・・・・・・勇者マレトはその光に包まれ、飲まれるように消えていった。

◇　◇　◇　◇

太陽が輝く空・・・・・それを覆い隠すほどの高さで立ち並ぶ、数多くの高層ビル。

そのビルの陰と太陽の光が街中にメリハリある色を添える。
車道には、車が長い渋滞の列を作り、都会のスクランブル交差点では、多すぎる人ごみがギリギリの距離感でのすれ違いを繰り返す。
そこは日本のコンクリート社会のど真ん中、東京だ。

そんなビルの一角奥地にある暗がりに包まれた静かなごみ置き場。
人気のないその場所が一瞬だけ強い光沢に包まれる。そう・・・・・魔術に似た青い光に・・・・・するとその場に現れるつぶらな瞳をした黒髪の少年。手に持つ剣と身にまとう勇者の服。胸元には先ほどのバルジルから受けた魔術の後がしっかりと残っている。

「えっなんだ?・・・・バルジルの魔術??」

いきなりの事態に驚いたマレトは、その事態をバルジルの魔力だと勘違いをしてしまった。そして、そうではない事に気がつくと、剣を身構え機敏な動きで周りをキョロキョロと見渡す。そこに見えるのは、今まで見た事もない建物や景色の数々。

ドルガミンという異世界の勇者が、現在の日本へと時空異空のトリップをしたのだ。

こうして、勇者マレトの異世界『ドルガミン』とは違う『日本』での新たな冒険が始まった。

1、ドルガミンとは違う別世界

ブゥゥン・・・・・ファンファン！！

車のエンジン音とクラクションがこだまする街中。歩道には、足早に歩き去っていく会社員達がチラホラ見受けられる。その街中をビルの合間の細い路地から覗くようにゆっくりと顔を出す少年が・・・・・そう、勇者マレトだ。

そのすぐ近くをサラリーマンが過ぎ去ると、驚いたように出した頭を素早く引っ込める。そして、しばらく時間が経つとまたゆっくりと顔を覗かせる。その表情は、野生の猿のように純粋で、動きも敏感だ。ちょっとした音や動きにもすぐに反応を示す。

そしてまた数人の大学生グループがしゃべりながらその前を通ると、驚き焦る動きで瞬時に頭を引っ込めた。すると、陰中のビルの壁に背中がくっついているかのように張り付き、息を呑み、動きを固め呟く。

「これはいったいどういう事なんだ？ここはどこだ？ドルガミンでは見た事ない場所だけど・・・・・・」

目に映る目新しい建物と不思議な服の人々。マレトは、あまりにも予想だにしなかったその事態に困惑をしていた。大きく息を吸うと、何とかその気持ちを落ち着かせるように、その全ての息を吐き出す。すると今度は、心配そうな顔で手のひらに目をやると『ボワッ』っと白く輝く玉を魔術で作り上げる。

「よし！大丈夫だ・・・・魔術は使える。」

予想外の事態に不安になり、自分の魔術が使えるかどうかを確かめたのだ。そして、その腰にくくりつけてある剣に手を添えると、見開いた目で脅えながら唾をごくりと飲み込む。

「ここでじっとしていても何も変わらない・・・・・僕には魔術も剣術もある。僕はドルガミンで魔王を倒せるとまで言われていた勇者だ。襲われたって・・・・・・勝てるはずだ!!」

自分にそう言い聞かせるように独り言を呟くと、意を決して勢い良くその街中に飛び出した。あからさまに戦いの意思を示してしまってはまずいと思ったのか、剣を身構えることなく足を大きく開き、腰にある剣に両手を添えて『いつでも剣を抜ける構え』で人々を睨むように見渡す。

「ちょっと何あれ・・・・・」

「バカ!見るな見るな!!やばいってあいつ・・・・・・・」

「何かの撮影??」

「んなわけねーだろ。コスプレだよコスプレ!!だっせぇー・・・・・」

聞こえてくる近くのカップルの会話だけではなく、少し離れた人達もそんなヒソヒソ話をしているのがその目線と動きだけで見てわかった。

場違いな容姿をしたマレトを見て、何だか見てはいけない物を見るような扱いだ。そんな態度を示す人々を見ても恥ずかしいとも思わないマレトは、むしろ襲う気配のないその態度に極度の安心感を味わっていた。

そして、安堵の表情を見せると、力を抜くようにその構えた体制を崩し堂々と前へと歩き出した。
その容姿に驚き、通り過ぎては振り返る東京の人々。そんな目線など気にもせず、少しずつ見慣れだしたその景色をもう一度ゆっくりと見上げるように見渡す。そして、口を開いた圧巻の表情を作りポツリと一言呟いた。

「すごい文明だな・・・・・・・」

明らかにドルガミンの世界とは違った、高度で不思議な日本の文明。ドルガミンに広がっていたのはまさに中世ファンタジーの世界そのものだった。

草原に森に川に山に、時たま見受けられる小さな町や城。それがここ日本では硬いコンクリートで固められた高い建物が立ち並び、走り去る意味不明な機械が所狭しと動き回っている。あまりにも違いすぎるその世界を目の当たりにしたマレトは、自分に置かれたその立場をようやく理解し始めたようだ。

「間違いない・・・・・異世界に迷い込んだみたいだ・・・・・・・・」

それに気づくと、その表情を不安の色に曇らせ始める。

今までに一度も経験した事がない異空トリップ。もちろんそんな話だって誰からも聞いた事などない。実際そんな立場に自分が置かれてしまって、いったいどうやったら元の世界に戻る事が出来るのか・・・・・・マレトにはドルガミンに戻る方法などまったく検討がつかなかった。

そんな想像を頭に思い描くと、歩く足取りも重くなり、目線も下へ下へと落ち始める。それでも、何とかもう一度戦意を取り戻すように『キッ』っと前を見て呟いた。

「戻らなきゃダメだ・・・・・僕にはやり残した事がある・・・・・・」

その頭に思い描くのは、バージャス国王子、バルジルとの死闘。ドルガミンの平和を取り戻す為に何としてもバルジルを倒さなければならない。そしてまた新たに、勇者である自分がいないドルガミンのあり様を頭に思い描いた。そこに映し出されるのは略奪や惨劇の数々。罪なき者が殺され、人々が恐れながら生活をするその姿。そんな想像を消し去るように頭を振ると、もう一度周りを見渡してどこ向かうわけでもなく前へ前へと駆け出していった。

走るマレトの足だけでは、たどり着けるはずの無い別世界のドルガミン。それでもマレトは、東京の街中にある雑踏を掻き分け、無我夢中で悲しく走り続けた。

2、タクシーに乗る勇者

東京の街中を走り、探し続ける。マレトが探すのはあの不思議な光・・・・異世界に導かれた魔術に似た青い光だ。
立ち止まっては周りをキョロキョロと見渡し、また駆け出しては立ち止まり、周りをキョロキョロと見渡す。何度となくそんな事を繰り返すとさすがに疲れ果てたのか、駆け足を歩きへと変えてしまう。そしてついに立ち止まると、諦めたようにその道端に座り込んでしまった。

どこを探しても見つからないその光。もちろんその光というのは、日常的に現れる物ではなく何らかの理由で作られた特別な光、そんな光など探して見つかる物でもない事ぐらいは、当の本人が一番良くわかっていた。
それでも、じっとしていられないのは人間の本能。とにかく何かをしていなければ『元の世界に戻れない』という極度な不安に襲われてしまうのだ。しかし、もう何もかもをやり尽くしてしまったマレトは、座り込みながらアスファルトに大粒の涙をこぼし始めた。ドルガミンに帰れない悲しさを、涙という形に変えるように・・・・・

無情にも、そんなマレトを見ても、見てみぬ振りをして歩き過ぎ去っていく日本の人々。マレトを哀れむ人など1人もいなく、喋りかけてくれる人もいない。それもそのはず、それがこの世界での一般的な常識の冷たい態度だからだ。

そんな冷たい態度をする人々に腹を立てたマレトは、全てが投げやりな気持ちになってしまった。そして、その怒りをぶつけるように周りに持てる魔術全てを繰り出してやろうと手をかざした。込めた力が溜まり集まり、魔術の玉が手のひらで一瞬輝きだす。

するとふと、一つの物体にマレトの目が止まりその魔術の光が消えうせてしまった。そして不思議そうに今まで見た事がないその物体を見つめ続ける。ずっとうるさい音で、すばしっこく動き回っていた意味不明なその物体・・・・・そう車だ。

不規則な動きをしながら高速スピードで移動をするその乗り物。マレトは立ち上がると、最後の望みを託すように車道に停めてある1台の車に歩み寄っていった。

近づくと、その後部座席のドアが自動で開く。それに一瞬驚くと、そのドアからゆっくり中を覗かせ運転手に話しかけた。

「あの・・・・・すみません。ドルガミンまで連れて行ってくれませんか？」

「あっ??ドルガミン??オロナミンだかリポビタンだか知らねーけど、この車はタクシーだから！どこへでも連れてってやるよ！！」

笑顔で答えるタクシー運転手。その自信ある運転手の表情を見たマレトは、途端に幸せそうな満面の笑みを作った。そして車に乗り込むとすぐにお礼の一言を言う。

「あっありがとうございます！！宜しくお願いします！」

この時マレトは、この異世界の人達にとっては異空トリップが当たり前で、この不思議な乗り物を使って異世界との行き来をしているのだと、完全な勘違いをしてしまっていた。そんなマレトを乗せた東京のタクシーは、行ける筈のない別世界のドルガミンへ向けて、都会の道を走らせるのだった。

3、解き放つ魔術による爆発

「しかしお客さん・・・・不思議なファッションだね。何だ・・・あの・・・・コスプレってやつかい??」

もう定年を迎えているほどの年齢をした運転手。無い知恵絞っての必死な会話だ。しかし、異世界の勇者マレトはその運転手よりも更にまったく知識が無い。というより、この世界の事は無知そのものだ。首を傾げる事でしかその答えを返せないでいた。

「あ・・・ああ、まあどうでもいい事だけどな・・・・・で、どこに行くんだい?さっきエスカップだかタフマンだか言ってたけど・・・・」

気の利いたギャグが言いたいのか、ただの老体によるボケなのか、その答えはわからないが、とにかく言っている事が先ほどとまったく違っている運転手。そしてまたマレトは不思議そうに首を傾げると頭の上を飛び交う『?』をそのままに、その答えを返した。

「あ・・・・・はい、ドルガミンです。早くドルガミンに戻って王子バルジルを倒さないと、人々が大変な事になってしまうんです。」

必死に訴えるマレトだが、そんな気持ちはもちろん伝わらない。

「倒す??王子??な~に言ってんだアンちゃん!!テレビの見すぎか?ゲームのやり過ぎか?そんな格好までして街中うろうろして・・・・所でお金は持っているんだろうね?」

さすがに信用も無くなり心配になったのか、運転手がマレトを問い

詰める。

「あっ・・・お金は持っていませんが・・・・・」

その答えを聞くとすぐに、運転手が急ブレーキを踏み、車を停車させる。

「何??お金を持ってない?無賃乗車か!!くそっ・・・・・!親はいるのか?」

「父は戦士でしたが、魔族に殺されました。母は今もバルジルの城近くに住んでいますが・・・・・今頃は・・・・・」

「ふざけるのもいい加減にしろ!!大人を馬鹿にしやがって・・・・・待ってろ!今すぐ警察に電話してやるから!!」

先ほどまで優しかった運転手が、ここまで荒々しく声を張り上げる事態に空気を読んだのか、マレトは焦りドアを開けると外に飛び出した。

「おい!!ちょ・・・・・・ちょっと待て!!」

運転手も慌てて外に飛び出す。そして、ゆっくりとマレトに近づく・・・・・

「待ってろ・・・・すぐに警察に電話してやるから・・・・」

そう言いながら上着の内ポケットに手を入れ携帯電話を取り出そうとした。その姿を見たマレトの脳裏に、魔術の杖を取り出す魔法使いの姿が浮かび上がる・・・・・・

「やっ・・・・・・・やめろぉぉぉー！！！！」

未知の世界の魔術に怯えたマレトが、両手を前に突き出す。

『ブゥオォン！！』っという音と共にその両手から小さな光の玉が作り出された。そして両手を振り上げると勢い良く前に振り下ろす。その腕の動きに合わせて光の玉が前方へと勢い良く放たれた。

ボオォォォォン！！！

光の玉がタクシーにぶち当たると、爆発音を上げタクシーがこっぱ微塵に吹き飛ぶ。

「えっ・・・・ええええええ？？？どういう事だ？？」

焦り戸惑うタクシー運転手。そして、あんなにもマレトを無視し続けていた街中の人達も瞬く間に集まりだし野次馬と化す。

「えっ何なに？？」

「映画の撮影か？」

「テロだろテロ！！やばいって！！」

マレトは集まりだす人々のその反応を見て、魔術がこの世界には無いものなのだと確信をした。

ウゥゥゥゥー・・・・・・！！

赤い光を撒き散らしながら近づいてくるその車・・・・パトカーだ。無知の勇者マレトでもその危険な雰囲気は察知できる。すぐに駆け出すとその野次馬の中を掻き分け逃げ出した。

「おっ・・・・おい！！テロリストが逃げるぞ！！」

マレトは、ざわめき出す野次馬を無視して、ビルとビルの間の細い路地を駆け抜け続けた。

そしてもう行き止まりと言う所まで来ると、息を切らし中腰になる。

「おい！！確かこっちの方に逃げたぞ・・・・・・・・・・」

遠くから聞こえてくる警察官達の声。もう無理だ・・・・・っと諦めかけたその時！横から飛び出た手に引っ張られマンション入り口に引きずり込まれる。そしてそのままほつれた足で連れられるように階段を駆け上がると、ある一室に滑り込むように入っていった。

4、オタク達の秘密基地

「こっ・・・ここは・・・・・？」

部屋の玄関先で尻餅をついたマレトが、わけもわからぬ事態に焦り呟く。

「し～！！静かにして！！ばれちゃうよ！！」

口元に人差し指を押し当てながら顔を近づけてくるその女性。先ほど、マレトをマンションに引きずり込んだその犯人だ。その女性は、ドアの鍵を閉めるとすぐまたマレトをかばうように座り込みドアを見つめた。

その容姿は、女性と言うにはまだ幼い、１０代半ばといったマレトと丁度同じ歳ほどの少女だ。長い髪に小さな顔、少女の無邪気さを表現するかのように、純粋で大きな瞳をした小柄でかわいらしい少女だ。

１つだけ不思議に感じるのがその服装。明らかに外行きとも家着とも言えないそのファッション。黒いハットに膝上までの黒いワンピース。全身黒で固められたいびつなファッションだ。そして何より、手に持つ杖は腰が悪いおばあさんが使うといったその用途とは違い、杖先に大きなルビーを飾った短くきれいな杖だ。

「・・・・・？魔法使いですか？？」

驚くというより嬉しい。先ほど疑った魔術の存在を覆すような少女の身なりを見て、期待の表情でマレトが問いかける。

「だから静かにしてって！！」

少女はそんなマレトの問いを黙らせて、ドア先の声に聞き耳を立てた。

「おい！！こっちの方で足音消えたよな！！」

「はい、間違いないと思いますが・・・・」

「ここのマンションの住人だったんじゃないのか？？」

「わからないですよ、そんなの！！」

「もういい！！！別の所を探そう！！」

そんなやり取りの後、その足音は階段を降り、下へ下へと消えていった。

「ふ～良かった・・・・助かったね！！」

ほっとした笑顔に変えたその少女が、マレトの前で立ち上がるとすぐに自己紹介を始める。

「始めまして。私は、光田（みつだ）　夕（ゆう）高校一年生です！！君のお名前は？？」

「えっ・・・ああ、ドルガミンの勇者、マレトです。」

その返答を『きょとん・・・』っとした顔で見つめるユウ。そして、その表情をすぐに馬鹿笑いへと変えた。

「あはははっ！！！すごいこだわりよう！！そこまでの発想はユウにもなかったよ。」

そう言いながらそのマレトの服を釘いるように見つめる。

「それにしてもよく出来ているコスプレねぇ・・・・・同じコスプレイヤー（コスプレをする人）として私ももっと勉強しないと！」

「あっ・・・あのぉ・・・・・魔法使いなんですか??」

もう一度振り出しに戻るようにユウに質問をするマレト。そのトーンから期待は薄らいでいるように感じる。

「そう！魔法使いだよ！えへへぇ～よく出来てるでしょ？作るの大変だったんだから！これ。」

ユウは自慢げにその服を見せびらかし、かわいらしいポーズで胸を張った。その姿を見たマレトは、今まで気づかなかったその部屋の全貌をそのまま見渡した。

奥の棚に並べられた個性的な数多いフィギア。その反対には銃や軍服などのミリタリーグッズが並べられている。壁に目を向けるとかわいい2次元キャラのポスターとアイドルのポスターでいっぱいだ。部屋中央に置かれている座敷テーブルに目を向けると、そこにはパソコンが1台と正面にテレビ。そして、そのテーブルを挟むように2人の男が座っている事に気がついた。

「あっ・・・・・すみません、気づきませんでした！こんにちは。」

気づいたマレトが焦り挨拶をすると、パソコンに夢中になっている男性がその目線を変えぬまま『ぼそり』と答える。

「ああ・・・・いいよ。ユウのコス友（コスプレ友達）だろ？ゆっくりしていきなね・・・・・」

そっけない挨拶をするこの男性。

髪は不潔なギトギトで、見た目は小太り。かけるメガネは顔の肉厚でそのへの字のテンプル縁が皮膚にまで食い込んでいる。Tシャツをズボンにしまっているその服装から見た目への美意識の低さが伺える。

「あっ・・・・・あの人は、ここに住んでる大学生。根本（ねもと）　竹蔵（たけぞう）さんです。タケちゃんって呼んであげてね。」

優しい笑顔で説明をするユウ。続けて隣の男性に目を向けると・・・・・・

「で・・・・その隣にいる迷彩服の男の人が、フリーターの服部（はっとり）周司（しゅうじ）さん。シュウちゃんでーす。」

と迷彩服の男性を紹介した。

迷彩は服だけではなく被る帽子も迷彩柄だ。細身の身体ときつく睨む表情で、手に持つエアガンの拳銃を大切そうに磨いている。その男性が、睨む目線をエアガンからマレトに変えると、荒々しい声で言い放つ。

「ゆっくりしていってもいいが、ミリタリーグッズとアイドルのポ

スターには指一本触れるなよ！！！」

そしてまたゆっくりと、エアガンの拳銃を細部にわたり几帳面に磨き始めた。そんなシュウを見て、ユウが周りに聞こえないように、マレトの耳元で・・・・・

「・・・・・気をつけて・・・・・シュウちゃんはすごー・・・・・く几帳面だから。」

とヒソヒソと言い伝えた。

「所でマレトは何で警察官なんかに追われていたの？コスプレ仲間だったから思わず助けちゃったけど・・・・・」

ユウはなんと同じコスプレ仲間と言う理由だけでマレトを助けていた。そんな行動がまた無邪気さを感じさせる。

「あ・・・・・さっき街中で魔術を使って爆発させたら騒動になってしまって・・・・・」

「まじゅつぅ??えっ・・・・もしかして・・・・・・・・・マレトもユウと同じ??」

その言葉に、もう一度期待の目を輝かせるマレト。ドルガミンの魔術を使える人がいるという事はドルガミンと繋がりがあるという事だ。

「ドルガミンの魔術が使えるのですか??」

「ドルガミン??マレトの習っている教室の名前は知らないけど・・

・・・ユウも習ってるんだ！マジック！！魔法使いのコスプレやってる子が、マジック出来れば目立つかなぁ～って思ってさ。見て見て！」

そう言うと、目の前にある杖を勢いよく振り、見事に作り物の花へと変化させた。

「すごいでしょ！もっともっといろんなマジックを教わってるんだけどまだまだ見習いで・・・・・・・警察を呼ばれちゃうほどのマジックってすごいね！！今度見せてよ！その爆発マジック！・・・・・火薬も使うのかな・・・・・・？」

「そうですか・・・・ドルガミンの魔術とは違うみたいですね・・・・・・・・この世界の魔術は。」

ユウの言っている意味はさっぱりわからなかったが、自分の期待と希望が断たれた事はそのマジックを見てはっきりとわかった。ドルガミンとの繋がり・・・・・・・・ドルガミンの魔術とはまったく別物の仕掛けあるその魔術を見て、またマレトの表情が暗くなる。

そんなマレトの気持ちに気づかないユウは、ただただ単純な質問を繰り返し続ける。

「所でマレトはどこに住んでるの？」

「・・・・・ここからはすごく遠い世界です・・・・・・・」

「えっ？じゃあ東京には住まいないの？」

黙りうつむくマレト。その会話を、聞き耳立てて聞いていたシュウ

が、エアガンを磨く目線を変えぬままマレトに代わってボソリと呟いた。

「地方からの家出じゃないのか？東京のコスイベ（コスプレイベント）とかに憧れて、勢いで東京に来たんだろ。」

その言葉を聞いたユウは、深刻な顔に変えるとまたマレトを見つめて問いかける。

「そうなの？」

ドルガミンに戻る希望を断たれたマレトは、会話の意味もわかっていなかったが、その空気だけで静かにうなずくだけの返事を返した。

「ユウと同じ歳くらいなのに・・・・すごいね。よし、それなら今日はここに泊まって行けば？ここなら何日居たって大丈夫だし、ご飯もお風呂も問題ないよ！ここはユウと、シュウちゃんタケちゃんの秘密基地なんだから！！」

無邪気な笑顔でVサインを前に突き出すユウ。

「おっ・・・・おい！勝手に僕の家を秘密基地って紹介するなよ・・・・・」

そんなユウの軽はずみな言葉を聞いて、この家の世帯主であるタケがメガネの位置を直しながら怒った。するとその隣にいるシュウが、タケの言葉を否定するように横から野次を飛ばす。

「何言ってんだよデブタケ！ここはすでに俺達3人の家だぞ！！だから休日はこうしてみんなで集まっているわけだし、この家に俺の

大切なミリタリーグッズやアイドルポスターを常備しているんだろ！」

「何言ってんだよ！ミリタリーグッズもアイドルポスターも邪魔だから早く持って帰ってくれっていっつも言ってるだろ！！」

「何だと？？俺はミリタリーグッズが近くにないと不安で仕方なくなるんだ！！」

「だからここは僕の家だって言ってるじゃないか！！！僕は裏切りの無い二次元キャラとフィギアだけに囲まれた生活をしていきたいんだよ！！」

「もー落ち着いてよ2人とも！！3人はお互いを認め合った結束高いオタクグループでしょ！とにかく今日は、マレト君をここに泊めてあげて！ね！いいでしょ？タケちゃん！」

その言葉を聞いたタケは、渋々といった表情で静かにうなずきを返した。

ひょんな事から、オタクグループの仲間入りを果たした勇者マレト。不安は変わらず残り続けるが、とりあえず寝床を確保する事が出来た。こうして勇者マレトは、辛く長い日本での生活の第一歩を踏み出す事となった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6610y/

勇者の新たな冒険　～日本と言う世界での戦い～

2011年11月23日22時47分発行